

『衣装から見た色彩—三つの時代の色彩と身分—』

11K047 小田里央菜

はじめに

私は色彩に対し強い関心を持っていた。色への関心が高まったのは、高校時代になってからである。古典を学ぶ過程で、『源氏物語』をはじめとする古典の作品に、現在使われていない色彩名が使われており、資料などでその色彩を目にするうちに、日本人が色彩に関して敏感で多様な文化を持つことを知った。

大学での研究を決める際に、高校で学んだ事を思い出し、それを本格的に調べ、研究していきたいと強く思い、卒業論文のテーマに選んだ。

研究に当たって注目したのは、色彩と時代の階級・階層との関連である。現在色彩は個人の好みなどにより自由に使われることが多いが、『源氏物語』などを読むと作中の登場人物はその身分や位に応じて纏う装束の色が決められている。飛鳥時代の聖徳太子の「冠位十二階」で役人の位を表す色が定められたように、古くから色彩は身分を表すものとして用いられてきたのである。

そこで、私は色彩と階級の関係に着目し、平安時代・鎌倉時代・江戸時代という三つの時代を取り上げて、それぞれの古典や文化、史実から当時色は人々にどのように身分を表したのか、西洋文明の影響を受ける以前の色をどのように認識していたのかを考察していきたい。

1. 日本の色彩名～色の起源～

日本には古くから多くの色彩が存在する。現在ではあまり使われていないと思うが、日本独自の古代色彩名は非常に多い。その中でも最も古い時代から語り伝えられてきた言葉と思われる色彩名に「あか」「あお」「しろ」「くろ」がある。これらは文章では「赤」「青」「白」「黒」と中国の色彩名の漢字を仮に使っているが、中国のそれとは違う。

(1) 赤と黒

農耕民族といわれる古代日本人は、生活環境の為か、感覚の主体を「あかるい」「くらい」の両面に分けている。明るく気持ちのいい天気と、暗い感じの天気というように、赤は「明るい」から、黒は「暗い」からきたと考えられる。

古い文献を見ると現在の赤色（Red）など暖色系の色相¹を持つ色彩は、「あか」と表現されることが多い。具体的には紅色・緋・赤・朱・橙・赤橙色・ピンクなどを含み、種類は非常に多い。そして古代日本語ではすべて「あか」である。

これに対し、「くろ」は暗いという感覚から生じ、「あか」の正反対の寒色系の色相すべてを表

しているとみてよい。古代の文献に残っている文字で「くろ」と読むものは、黒・玄・烏・帛・阜・緇などがあり黒茶色から純黒、さらに青黒そして橙色の黒味がかかったものまで、どれも「くろ」と称する。そして、「あか」と「くろ」はそれぞれ独立して存在せず、一対となっている。

次に漢字について見てみようと思う。「赤」は呉音²では「しゃく」、漢音³では「せき」という。その語源は『金文⁴』などで「大火」の二文字がこの一字になったと考えられる。火が大きく燃える様子を表し、字そのものが色相または様相⁵を示し、古代中国での「赤」は一つの規定された色相を字で示すといえる。

「黒」は呉音・漢音ともに「こく」であり、『金文』『文』では、「炎」の上に「四」形のもの、「田」が乗る形をしている。これは煙抜き障子の枠に似た形か火にかけ煮炊きする鍋・釜の類と見受けられる。どれもすすけて黒ずんでいることから、一つの黒という色相を表している。

中国では「黒」は上記のように認識されているようだが、「くろ」は日本古来にして独自の物と考えたほうがよい。日本独特の色相表現は今も生きており、「みどりのくろかみ」などが例として挙げられる。

(2) 白

中国では呉音「びやく」、漢音「はく」といい、語源は親指の爪の形。つまり、親方や権威などの表示に始まり、太陽や天をも表すようになった字である。

日本の「しろ」は、当時の日本人が不思議と感じたことで、人間や自然現象以外のもの、つまり当時の信仰の対象に関係のある何らかのものや怪異的なものを表すときに用いたとみられる。白鹿、白雀、白狐、白雉、白鳥、白馬などによるこのたとえは多い。

さらに、「素」という字を使う場合もあるが、この時は淡い黄色から、濃い茶色・ホワイトを示すときもあり、自然そのままの色には「素」、自然も含め神秘性を持つ、怪異現象とされるものの表現には「しろ」と使い分けたと見られる。

(3) 青

中国での「青」は呉音を「しょう」、漢音で「せい」である。『金文』では「生丹」と読めるもの、そして井戸のそばに木が立っていると判じられているものがあつた。「丹」は鉱物で、おそらく銅から生じる緑青⁶（ろくしょう）という錆をさすと考えられる。緑青は美しい緑色をしており、水辺の樹木も緑色である。

後者は井戸を表示するために横に木を立たせたと見れば、井戸の中の水の色、または水面に映った空の色とすれば、「青」は緑色をさしていたと見るのが妥当と考えられる。

この「青」が中国でいつから青色（Blue）を指すようになったかは分からない。が、古代中国で青色を示す字に「縹（ひょう）」があるので、青の色相は今で言う緑がかつた青（Blue green）とされる。たいては「縹」は赤みのあるブルーとされる。

日本での「あお」は、「あか」の暖色系で明るい色彩群に属さず、「くろ」の寒色系の暗い色彩群に属さない、中間の色彩すべてと考えられる。その色彩は非常に多いが、古代日本はそれを「あお」の一色彩名で表している。「あお」と呼ばれていたのは、今の緑色（Green）、青緑

(Blue green)・青色 (Blue)・青紫 (Blue violet)・紫 (Violet)及びそれらの中間色とされる。

現在信号の緑色を「青信号」と呼んだり、野菜を「青物」「青果」と呼んだりするのもやはりこのことが由来していると思われる。古代日本の感覚でいえば信号機や野菜の緑色もまた「あお」に含まれると考えられるからである。

第一章 平安時代の色彩～貴族の色～

1. 紫の地位の変化

現在、紫といえば高貴な色というイメージが強い。紫にもいくつもの種類があるが、いずれも「高尚」「優雅」といったイメージがある。日本でも聖徳太子の冠位十二階の最上位の色という事は広く知れ渡っていると思われる。そこで、なぜ紫色にこのような印象をもたれることになったのか調べてみたい。

(1) 五行思想

事の起こりは古代中国に遡る。当時発生したのが五行思想である。

これは後に陰陽思想と融合し「陰陽行説」が春秋戦国時代⁷（紀元前770～前221）に中国の世界観となった。それは、まず万物が陰陽の二極に分けられ、夜と冬、月と太陽、さらに女と男を対極とする二元論を特徴とする。五行は自然・社会を「木・火・土・金・水」の五要素で解釈する。色彩では木は青、火は赤、土は黄色である。これは色の三原色であり、これを組み合わせることによってどんな色も表現できる。

紀元前の前漢⁸の時代に、こうした色相への概念があったということは、多彩な色をあらゆる技術がすでに完成したことを物語っている。そして、五色があれば万物の彩を表現できると考えられる。「五彩（色）に輝く」という表現があるが、これは文字通りの五色ではなく全ての色というべきで、このことからきている。しかし、五行思想に「紫」はなく、高貴とされる紫の色はまだない。

周⁹末から秦¹⁰、漢¹¹時代の礼についての解説・理論を記した『礼記』には「周人は赤を尊ぶ」とあり、赤が高位の色とされる。また、中国古代の伝説上の帝王に「黄帝¹²」という人物がおり、三皇五帝と呼ばれた為政者の第一位に置かれている。「五行」で黄は土にあたり、中央に位置することから最高位とされたと見える。歴史の流れから見て、古代中国はまず黄色を最高位とし、後に赤に変わったと見られる。

(2) 紫の地位の向上

ではなぜ、紫が五行思想に出ていないのか。漢代に記された『論語』の「陽貨篇」に、「子曰、悪紫之奪朱也、悪鄭声之乱雅楽也、悪利口之覆邦家者¹³」（子曰く、紫の朱を奪うを悪む。鄭声の雅楽を乱るを悪む。利口の邦家を覆すを悪む）とある。

これは紫色が正色の朱より流行したり、みだらな鄭¹⁴の国の歌が宮廷の音楽よりもてはやされ

ていたり、口達者な者が国を覆したりするのが悪いと、正統な物が邪悪なものに凌駕される世間を皮肉ったものである。これによると、赤が正色とされた当時、孔子が嫌悪や憎しみを感じる対象の一つにあげているように「混合色の紫」の地位は低かった。その一方で、人々が紫をもてやすくなったようでもある。

なぜ、このような現象がおこったのか。陰陽五行説と共に、当時の中国には「神仙説（神仙思想）」が流布していた。これは人間界とは別に「神仙界」が存在し、そこに昇天すれば不老長寿の仙人となるという考え方である。この神仙界には紫雲がたなびくとされ、これは徳の高い天子が在位するときに現れ、後の仏教でも、念仏行者の臨終に際し阿弥陀仏がこの紫雲に乗って来迎するといわれた。時代とともに、この思想をもとにした「道教¹⁵」が発展したことを考えると、紫の地位の向上もこれが原因かもしれない。

さらに『晋書¹⁶』では、古代中国（六朝¹⁷頃か）では、北極星を紫微星、その周りの星座を紫微垣と呼び、その天界は天帝¹⁸の宮殿といわれた。辞書で「紫」には、「紫閣」「紫宮」「紫極」「紫禁」「紫宸」「紫台」「紫闈」「紫庭」とどれも天子の居所、皇居を意味する言葉が掲載されている。

日本では飛鳥時代、摂政となった聖徳太子は隋の制度を取り入れ政治をした。その功績のひとつに「冠位十二階」で、位階を示す冠の色を五行思想の基本色の青、赤、黄、白、黒の上に紫をおいて「徳」とし、最上位の色とされたのがわかる。この制度は以後も続き、改定によって若干の変化はあったが、紫はほぼ上位であった。服装もそれに準じ、婦人たちもそれに習うとされ、高貴な人は紫の服を多く着用したと考えられる。また、禁じられてはいたものの禁を破るものがあったので、聴色（ゆるしいろ）というごく薄いものならば使用を許すという特例が設けられた。

2. 源氏物語と色彩

源氏物語とは、平安時代紫式部という宮廷に使えていた女房が書いた長編の物語で、主人公の光源氏が多くの女性と恋愛し、一時期失脚して隠棲し、そして返り咲いて最後は天皇に次ぐほどの地位につき栄華を極めるといのがあらずじである。作中では色彩が数多く登場し、王朝の文化を知るうえで重大な手がかりとされている。

源氏物語を実際に調べてみると、色彩に関する語があまりにも多く、一つ一つを取り上げるのは困難と思い、特に重要なものについて取り上げてみた。

（1）源氏物語で紫が意味するもの

源氏物語は色彩の描写が繊細である。その中でも特に関係が深いのは「紫」である。

『日本人が愛した色』で著者の吉岡幸雄氏はこのように語っている。

奈良、そして平安期でも紫が尊ばれていたという証拠は『源氏物語』を読み解くことによって得ることができる。

光源氏を主人公とする五十四帖からなる長大な物語を読みすすめると、この物語があたかも「紫づくし」とでもいうように、紫にちなむ事柄がふんだんにあらわれてくるのである。¹⁹

吉岡氏が述べたように紫に関わる事物がいくつか存在する。一つは、作者の名前。そう、紫式部である。彼女がこう呼ばれるようになった理由は後述する。次に、登場人物で三人。

一人は主人公の生母の桐壺²⁰の更衣²¹。身分自体は決して高くはないが、帝の寵愛をうけた女人であり、住んでいた場所からこう呼ばれる。そして、帝は彼女を愛したために桐壺帝と呼ばれる。

二人目は藤壺²²の女御²³。桐壺の更衣に生き写しの皇族の女性で、更衣の死後後宮に迎えられた。そして、光源氏の初恋の相手であり、源氏との間に不義の子（のちの冷泉帝）を産む。

そして、三人目は紫の上。前述した藤壺の女御の姪で、源氏が病の加持祈祷のために北山へ赴いた際に見出し、女御に似た容姿と血縁であることを知った源氏が自分の元に引き取って育て、後に実質的な正室となった。

更衣と女御は桐と藤、ともに花の色が紫である。紫の上については、「紫のゆかり」という言葉が関わってくる。これは、当時紫草の根（紫根）で染められた紫が、紫でもっとも上等とされていたようだが、これで染めた布や紙を他の物と重ねると、重ねたものに紫色が色移りしたそうである。近くにあるもの（＝縁（ゆかり）のあるもの）を染めることから、紫はゆかりの色とよばれたらしい。そこから、ある縁故から情愛を他に及ぼすという意味が生まれた。

源氏物語では、藤壺にゆかりのある人物であることから「紫の上」（幼少期は若紫）とつけられたという。「若紫」の巻で源氏は

手に摘みて いつしかも見む 紫の 根にかよひける 野辺の若草

という歌を詠む。自らの手で摘んで、早くわがものとしたいものだ、あの藤壺（紫）にゆかりのある野辺の若草であるから、という意で血縁を知った源氏は少女に思いを寄せたのが分かる。

そして、作者についてはやはり源氏物語の作者であることから今の呼び名がついたという。式部は父が式部省という部署の役人であったことから、紫はやはり紫に関連が深いことからだと思われる。その前は「藤式部」という呼び名であったというからやはり紫とのつながりは深い。

他にも最初の話「桐壺」で源氏と正妻の葵上²⁴の婚礼の場面が出てくる。その際、葵上の父の左大臣が次の和歌を読む。

結びつる 心も深き もとひゆ（元結²⁵）に 濃きむらさきの 色しあせずは

心を込めて結んだ元結の、濃い紫のように、夫婦の契りの色もあせぬようにという意味である。父親の娘夫婦への親心の表れである。

貴公子の元結には高貴な紫の糸で作られたものが使われ、左大臣はこの話で元服した光る源氏の元結を結ぶ役割を担った。その紫の色が変わらなければ、といい娘への源氏の想いが離れないことを願ったのである。

(2) 衣装の色に託した意味

平安貴族の衣装は、儀式などでの晴れの衣裳、日常の衣裳の如何に関係なく季節に合わせることは常識だった。「枕草子」で「すさまじきもの（興ざめするもの）」のひとつに「三、四月の紅梅の襲（本来は二月頃）」とあるように、それに反すれば非常識とみなされたのである。

そして衣装はどうやって調達していたか。源氏物語の「玉蔓」の帖に「衣配り」という一場面がある。これは年の暮れに天皇をはじめとする貴族でも高位の人たちは周囲の女性に衣装を贈る習わしであった。源氏もその習わしに従い、周りの女性用に衣装を御匣殿²⁶（みくしげどの）から取り寄せたり紫の上のもとで作らせたりした（紫の上は裁縫や染色にも優れていたらしい）。この際、紫の上はどれも美しいが、着る人の姿かたちをよく考えて選んであげてほしいといい、源氏は衣装の色からそれとなく方々の人柄や容貌を想像しようとしているのだろうと返す。あなたはどれがいいかと聞かれ、自分で鏡を見ただけでは決められない、あなたに選んでもらいたいと紫の上ははにかむ。そして、次話の「初音」で元旦の夕暮れに源氏はそれぞれの女性に会いに行く。

贈る相手に合わせて選んでおり、衣装の色にも意味がある。その例をいくつか抜粋してみた。

- 1) 紫の上：「紅梅のいと紋浮きたる葡萄（えび）染めの御小桂、今様色のいとすぐれたる²⁷」

葡萄染めの小桂と今様色の桂を選ぶ。葡萄染めは紫草の根をたっぷり使った高貴で高貴な色。今様色は、今流行の色という意味である。平安時代では紅花で繰り返し染めた輝くような紅色で、最愛の女性への贈り物が最も高価でかつ気品が高いものを選んでいる。

- 2) 明石の上²⁸：「梅の折り枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めきたる白き小桂に、濃きがつややかなる重ねて²⁹」

梅の枝や蝶、鳥が飛ぶ文様を織り込んだ白い着物に濃い紫の着物である。これは作中でこの女君が身分が低いながらも気品と教養を兼ね備えていること、源氏の娘の実母であることから高貴で品がある濃い紫を贈ったと見られる。

- 3) 花散里³⁰：「浅縹の海賊の織物、織りざまなまめきたれど、にほひやかならぬに、いと濃き搔練具して³¹」

海賊とは波に海松や貝、岩や松原など海辺の風景を写したもの。「初音」の元旦の夕餉れに会った時は「縹は、げに、にほひ多からぬあはひにて」そう華やかな色合いではないけれど、その年齢容姿にはふさわしいと感じるとある。

- 4) 玉鬘³²：「曇りなく赤きに、山吹の花の細長³³」

若い女性らしく華やかな色合い。「初音」で彼女に会った時、会うときさすがに美しく、それを山吹の衣裳が一段と華やかに見せて、隈なく輝いているようで、いつまでも見ていたいという心地になっていると源氏は語っている。地の文ではその後、父親代わりだがこのままではおさまらないのではと続いている。

- 5) 空蟬³⁴：「青鈍の織物、いと心ばせあるを見つけたまうて、御科にある梶子の御衣、聴し色なる添へたまひて」

鈍色とは後述するが、仏事や凶事の装束に使われた色である。年配ですでに出家した彼女への配慮でこの色の物を送ったと考えられる。

ここで、私見だが女性の内紫の上、花散里、明石の上の衣裳の色彩にはさらに別の要素があるのではと考えている。この頃の源氏は六条邸と呼ばれる広大な屋敷に住み、邸を四つの町に区分し、それぞれ春夏秋冬の風情が感じられるようにし、それぞれの季節を好む主だった女性を住ませた。源氏と紫の上は春、花散里は夏、冬には明石の上である。ここにはあげていないが、秋の場所には秋好中宮³⁵なる女性が住んでいる。先ほどの衣裳の色はそれぞれの季節に合った色である。春には葡萄染め、夏には浅縹（と海辺の紋様）、冬には白というように、源氏の衣裳選びの要素に相手の容姿だけでなく、相手の好みなどを配慮したと思われるし、源氏の美的感覚の良さの表れだと私は考えている。

源氏物語では華やかな恋愛の一方で、死の描写もいくつかある。特に源氏と関係した女性の何人か死に、源氏はその遠因を作ったこともあった。

当時、喪に服するときは鈍色（墨色）の衣裳を着、近親ほど色が濃いものを着る風習があった。妻の場合では夫は三ヶ月、夫であれば妻は一年間この色の喪服を着て過ごしたという。

源氏は作中で二回妻の喪を経験している。一度目は葵上。二度目は紫の上である。紫の上の死に対する源氏の悲嘆は尋常ではなく、作中ではかつて葵上が無くなった際の「限りあれば 薄墨衣 浅けれど 涙ぞ袖を ふちとなしける」（決まりであるから喪服の色は薄いけれど、袖には悲しみの涙が溜まっている）と読んだときの薄墨よりさらに濃い色の鈍い色を着ていると書かれている。

政略結婚で結ばれ、死の寸前になってようやく心が通った葵上の死も悲しく、もし死んだのが自分であれば葵上はもっと濃い鈍色を着ただろうと源氏は思っていたが、最愛の女性だった紫の上の死はそれ以上の悲しみであることが伺える。

第二章 平安末期から鎌倉時代～武士の色～

1. 平家物語の色

これまで源氏物語を中心にした古典から、平安時代当時の色彩について調べてきた。貴族にとっての色彩は季節の色、人々が自分の位や心情を表現する一つの方法として用いてきたものであり、色彩そのものも華やかな印象を抱いた。

そして、第二章では貴族に続いて平安末期から時代を動かして言った武士の観点から色彩を見ていきたい。これについては『平家物語』を参考に調べてみた。これは、軍記物語³⁶と称される形式の古典であり、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。」という冒頭の言葉は知っている人も多いだろう。冒頭のような無常観や因果応報という意味での仏教思想を基調に平家が台頭し栄華を極めるところから、源氏の反撃にあって都落ちし壇ノ浦で滅亡するまでが描かれ、鎌倉時代にこれに節をつけた「平曲」が琵琶法師³⁷により語り継がれてきたものである。

実際に読んでみると、作中に出てくる色彩の表現の豊かさは『源氏物語』と遜色なく、しかし華やかというよりも雄々しい印象を受けた。

2. 鎧の緋と位

武士の色彩の使い方では主なものと言えば、合戦のときに纏う鎧である。この時代の鎧は礼（さね）と呼ばれる革や薄い鉄板を糸などで綴じて作られ、この部分を「緋（おどし）」と呼ぶ。平家物語では数多くの種類の鎧が描写されているが、最も多いのが黒で、その次に緋や赤、萌黄、紫、小桜、それ以外では紺・藍・紅・淡紅・緑・浅黄・白などと色の豊かさは平安時代と変わらない。

色の違いはやはり身分や年齢に反映されており、「帥（そち）」という司令官にあたる身分は黒糸緋が最高であり、萌黄や紫裾濃、緋緋、唐綾緋などが多い。年齢では黒糸緋は30歳以上、唐綾緋は老兵、緋緋・紫裾濃のように派手なものは「帥」にあたる青年が纏うとなっている。

帥に次ぐ「将」では、青年大將は赤や緋が多く、黒がこれに続く。赤系統が多いのは味方を鼓舞するという効果を期待したと考えられる。

その下の「侍」では黒や緋、萌黄、小桜が代表的である。

次にいくつかの色について述べていきたいと思う。

1) 赤

『平家物語』では源氏と平氏の合戦の様子が語られているが、その合戦の一つに「宇治川の戦い」がある。これは同じ源氏の源義仲と頼朝の軍の戦いだが、頼朝方の武將である佐々木高綱が先陣を切って、そのすぐ後を梶原景季が続き、さらに畠山重忠が五百騎を率いて敵の待ち構える対岸に向かう場面で

そののち畠山、乗替に乗りてうちあぐる。魚稜の直垂に緋緋の鎧着て、連銭葦毛³⁸なる馬に黄覆輪³⁹の鞍置いて乗つたる敵の・・・」（その後、畠山は乗替の馬に乗って岸に上がる。魚稜の直垂に緋緋の鎧を着て、連銭葦毛の馬に金覆輪の鞍を置いて乗つた敵の）

という一節がある。

ここでは畠山重忠が対峙したのは義仲方の武將で、その人物が合戦で着用した装束は「魚稜の直垂に緋緋の鎧」である。魚稜は鈍い緑色、麴塵色であり、その上に緋色、茜染めの緋緋の鎧を纏っているのである。

この人物は長瀬重綱というが、詳しいことは調べてもわからなかった。が、前述の色使いを踏まえると将か侍にあたる人物であり、緋緋は味方への鼓舞かこの人物の好みによるものと思われる。

2) 紫

源氏物語では高位の貴族のみに許された高貴な色、主人公：光源氏の愛した女性にまつわる色

として紹介したが、今度は武士における紫について述べていきたい。

九郎義経は赤地の錦の直垂に紫裾濃の鎧着て、黄金（こがね）づくりの太刀を帯き、（源義経は赤い錦の直垂に紫の鎧を着て、金で装飾された太刀を帯び）⁴⁰

これは『平家物語』で後白河法皇の六条殿に義経が駆けつける場面である。
また、一ノ谷の合戦で平清盛の子、平重衡が敗走する場面も

裾に白いとで群千鳥ぬうたる直垂に、紫裾濃の鎧着て、（紺色の地に群千鳥の縫い取りをした直垂に紫裾濃の鎧を着て）

とここでも紫の甲冑が登場する。

義経も重衡もそれぞれ源氏・平家の主家の人間であり、他の武将の装束には遣われていない。作中ではこの二人が着用し、大將軍が纏う華やかな鎧であったらしい。

また裾濃とは平安貴族の女性の十二単でも使われていた配色（内側から外側に向かって濃くなるグラデーション）で平安時代の色の使い方がここでも生かされているのがわかる。

特に義経の描写は赤い装束の上に濃い紫の鎧、金で装飾された太刀と軍を率いる将としての華やかさが目に浮かぶようである。

3) 藍色

話は少しずれるが、室町時代にかけて武士の台頭とともに権力を持つようになると、その甲冑は紺色や濃紺で作られるようになった。

濃紺などのような黒に近い紺色は「褐色（かちいろ）」と呼ばれ、戦国武将たちは色名の「かち」と「勝」の字を当てて「勝色」とし、縁起を担いで武具の革や布帛（ふはく）をこの色に染めた。軍記物語では「褐色威（かちいろおどし）」や「褐の直垂」という言葉が現れ、特に韋（かわ）を濃い藍に染め緘にするのが流行したという。

播磨の国（現在の兵庫県）は古くから藍の産地として知られ、特に飾磨（しかま）に産する褐色が古くから「飾磨の褐」として尊ばれたという。

3. 紅と白

ここまでは武士の甲冑における色彩について記したが、平家物語では、さらに重要な色彩の象徴がある。それは旗の色である。合戦の際源氏は白旗、平氏は赤旗を掲げている。この時代には家紋はまだ存在しておらず、色で目印にしたのであるが、何故紅白になったのかは諸説ある。

一つは伝統と信仰である。日本では上古⁴¹以来朝廷の軍（官軍）は赤い旗を使っていたことから、平家はそれにならって赤を象徴とし、それに対し源氏は純粹無垢、清浄神明の色で神が宿るといふ色、神の加護（八幡大菩薩⁴²）を期待しうる色として白の旗を使ったという説。

二つ目は中国の影響によるもの。『保元物語⁴³』では源頼朝が唐牛の白い尾を旗竿の先に付けた指揮の旗が出てくるが、源氏が中国の戦鬪を模したものとされる。

色については、源氏の白はこの色が主君への忠誠を誓う潔白を表す色という武士の心意気の象徴という解釈があり、平家の赤に関しては、当時の朱色や赤は異国的で貴族的特権を象徴する色、さらに中国では邪を祓う力を持つという信仰がある。

このように、源氏と平氏が赤と白の二色を用いた経緯には諸説があり、詳しい事は定かではない。だが、この紅白に分かれて戦った歴史が今日、紅組と白組に分かれて競い合う学校の運動会や年末に世間を盛り上げる紅白歌合戦といった平和な形で受け継がれているのは確かである。

第三章 江戸時代～町人の色～

私はこれまでに平安時代の貴族を中心とした色彩、平安末期から鎌倉時代にかけての武士を中心とした色彩というように、時代とその時代の中核を担った人々に焦点を当て調べてきた。

この章では江戸時代、町人の色彩について考察する。元々、江戸時代の文化に関心を持っていたのだが、特に色彩について独自の動きがあることから、さらに深く研究しようと思ったのである。

1. 町人の豪奢さと奢侈禁止令

江戸時代は徳川氏によって、戦乱は収まり太平の世となった。初期には天草の乱などの騒乱もあったが、次第にそれもなくなっていき、五代将軍徳川綱吉の代には武士や町人に関係なく、豪奢な生活をするようになっていった。

特に町人、それも富を持つ者たちが富を誇示するような華やかな衣装を身にまとうようになり、幕府はこれを取り締まるために禁令を出した。

1683年（天和3）には具体的に

金紗、縫、惣鹿の子

右の品、向後女之衣類に禁制之

と出された。

金紗⁴⁴や豪華な刺繍を施したもの、惣鹿の子絞り⁴⁵などを女性の衣装に使ってはならない。さらに珍しい織物や染物を新たに出すことは一切禁止する。小袖一反について二百目より高価な物の売買を禁ずる、という内容である。また、外国から羅紗⁴⁶などの織物の輸入を禁じている。

（1）伊達比べ

この禁令の背景には、町人の豪奢さを物語る事件があった。1680年（延宝8）に綱吉が上野の寛永寺に墓参に行き、その帰りにかぐわしい香りに気づき、行ってみると金の簾と金の屏風とに囲まれ、派手に着飾った女性が周りの者に伽羅⁴⁷の香を焚かせ、金の扇子であおがせていた。

その女は浅草の富豪石川六兵衛の妻で、相当な贅沢者であるという。当時で言う「伊達者（人

目につくような派手な装いや振る舞いをする者)」で、天和から元禄（1681～1704）にかけて新興商人が華美な遊興に興じ、自慢の着物を着て競う「伊達比べ」なるものが行われていたという。

ここまでではないが、『好色五人女⁴⁸』のおさん、茂衛門の巻で道行く女性の服装に、「三つ重ねたる小袖、皆くろはぶたへに、裾取りの紅（もみ）うら、金のかくし紋」（三つ重ねた小袖は皆黒羽二重で、裾回しに紅裏を付け、金糸で縫った替紋⁴⁹）

と二十七、八の三人の子どもを連れた女が全く派手に趣向を凝らした格好をしている描写が見られるが、おそらく六兵衛の妻もこれに負けない出で立ちだったのだろうと思われる。

綱吉はこれに激怒し、六兵衛を追放し、家屋敷、財産を没収したという。

また、この時代は一般民衆に好まれる「流行色」といった現象が発生する。現代のような人気の「〇〇色」や「〇〇染め」といった流行は、元禄時代から盛んになるのである。

流行現象の最大の要素は歌舞伎にある。歌舞伎の人気役者の衣裳に用いられた柄や色がファンにもてはやされ、流行の発信源になり、役者を描く役者絵の浮世絵画家や瓦版・浮世絵の版元がそれを町民たちへ拡散したのである。

庶民は瓦版や浮世絵を通じ人気役者の衣裳の柄や色を模倣し、色名も役者にちなんだものがつけられ、それが役者色として流行したのだ。

実際の例を挙げてみる。当時抜群の人気を誇った二代目瀬川菊之丞（通称王子路考）という役者がいた。明和三年（1766年）の五月中村座での演目『八百屋お七恋江戸染』の中で下女お杉を演じたときに着た衣装の色が「路考茶」と呼ばれる緑色がかかった渋い茶色である。『浮世床⁵⁰』では「糞色」とけなされるような色だが、王子路考が使った色となれば、流行色に格上げされ、同時代の鈴木晴信の錦絵によく使われているので、人気の凄さが分かる。

この例が示すように人気役者が使っていた事により、ある色が爆発的な流行を引き起こす程に影響力が高かったことがわかる。

さらに赤について記したい。

町人が華やかな装いをするにつれて、化粧なども華やかになっていったが、特に目立つのは口紅や頬紅である。

古くから紅色を染めるのに使われた紅花は、化粧の原料にも使われ、江戸時代に東北の最上川周辺が新たな産地となり、日本一の生産量を誇った。近世までは一般庶民が口紅を使うことはなかったが、江戸の中頃から都市を中心に化粧品を取り扱う「紅屋」が現れた。

紅花による染めでも、動きがあった。華麗な小袖や振り袖を着て、その下に襲ねる襦袢や湯文字という女性の下着は、そのほとんどが紅花染めである。歌舞伎の用語に「赤姫」という言葉があり、劇中の姫君の役は赤地に金糸銀糸の模様の入った華やかな振り袖を纏い、一途に恋をする役柄を表す。江戸の文化・文政期（1804～1830）以降の小紋に茶や黒といった地味な色彩が流行しても、歩く時に着物の裾から歩みの進み具合によって、裏が覗くことを意識して、派手な色彩を使い、目立つようにした。

このような工夫を「裏勝り」といい、女性ならば鮮やかな紅絹、男なら羽織の裏に描き絵を施すなど見えない所に色彩や意匠を凝らし、庶民の美意識を表している。同時に赤は庶民の間にも使われるようになるまでに普及し、化粧の紅や襦袢や湯文字、裏勝りに用いられることで「女性

の色」となっていったように私には考えられる。

2. 江戸紫と京紫

前述のとおり、江戸時代初期は町人たちは華やかな原色に近い色を好んだ。が、時を経るうちに次第に中間色が好まれ、「粹な色」が流行するようになる。例えば、十七世紀後半の延宝から天和にかけ、桃色、藤色、水色、花色（薄い青）、瑠璃紺、鶯茶などが登場したという。

そして、この時代紫にもあらたな動きが見られる。この時代に紫の色名で増えたものがある。

(1) 定義

一つは「江戸紫」と呼ばれる。これは、1713（正徳3）年に「花館愛護桜」として二代目市川團十郎によって初演され、のちに「助六由縁江戸桜」という歌舞伎十八番の一演目になる主人公助六が締める鉢巻の色が桔梗の花に似た色であるから、青みの紫といわれる江戸紫の色名が定着したといわれるが定かではない。主人公が恋の病を患っている場合、紫の鉢巻を締めて登場するが、歌舞伎用語で「病鉢巻」と呼ばれ、本当の病人もこの紫の鉢巻を締めていたという。劇中で助六がこの紫の鉢巻を締めて登場する場面がある。

江戸で染めた色、江戸の町人が好んだ色、歌舞伎の助六の鉢巻の色と巷で言われ、江戸紫は青みの紫、京紫は赤紫という俗説があるが、根拠はないという見方も存在する。

京紫は平安時代以降、京都が染色の中心地であり、紫染めの伝統を引き継ぎ、江戸時代に生まれた東北の南部紫⁵¹、鹿角紫⁵²、前述の江戸で染められた紫の存在から産地を明確にするために付けられた名称である。

一説では京紫は古代紫の系統で茄子のような色（青みがかった紫）とするという。この説は『安斎随筆⁵³』の一節「今世京紫といふ色は紫の正色なり。今江戸紫といふは杜若の花の色のごとし。是葡萄染なり」からきている。これによると、江戸紫は杜若の花の色や葡萄色の語源となった山葡萄の実のようなやや赤みのある色だということになる。

江戸時代になり、紫の流行に伴って紫根染が盛んになり、江戸紫という流行色だけでなく紫を染めることは江戸や大坂に広がっていく。そして高価なものがあれば必ず模造品が作られるようになり「にせむらさき（似紫）⁵⁴」が出現した。

3. 四十八茶百鼠

江戸時代の寛永・寛文（1624～1673）を過ぎたあたりから、天下泰平を謳歌した元禄（1688～1704）にかけて江戸・京・大坂の大都市での町人は繁栄し、彼らは富を築くと同時に公家や武家のような贅沢な暮らしを望み、衣服にもそれが現れるようになった。

前述の奢侈禁止令が出されたことにより、庶民は紅・紫・金糸銀糸・惣鹿子といった衣裳の着用を禁じられる。

町人たちはそれを受けて、禁令に対し茶や黒、鼠系統の地味な色合いの縞・格子、小紋⁵⁵等

表向きには目立たないものを着用していった。歌舞伎においても町人や庶民の女性ならば黒い掛け襟、萌黄色の着物を着ていれば田舎娘の象徴、という風になっている。

が、それで終わらず茶や黒に様々な変化をつけ工夫した。どの色にも当時人気の歌舞伎役者・歴史的人物・風月山水等あらゆるものにゆかりのある名称を付けて、微妙な色相の変化を楽しんだのである。

その象徴が「四十八茶百鼠」である。茶色で四十八、鼠色には薄墨から墨まで百もの色があるとされ、本当にあったかはわからないがそれだけ多彩ということなのだろう。

町人は垢抜けしたさっぱりした精神性や態度・お洒落を好み、それが「粋」と呼ばれる美意識である。

茶色は植物が持つタンニンという物質を抽出し染められるので価格も手頃だったらしい事もあり、灰色ではなく「鼠色」と称したのは、戦乱の名残が残っていた時期で、火事や火葬を連想させる「灰色」を嫌い、「鼠色」という色名にしたという。これら以外では「紺色」といった藍染めの色である。紅や紫と違い禁じられることもなく、その需要はさらに高まっていく。この頃には日本人は木綿を着るようになり、その木綿を染めるのに藍は適していた。

以上の事から江戸時代は先の二つの時代と比べ華やかさよりは渋い色味が広く使われていたのである。

第四章 考 察

第一章から第三章で三つの時代の色彩と使い方について記述してきたが、ただ古くから同じように使われ続けたのではなく、それぞれの時代で表す意味の変化を伴っていた。この章では主に取り上げてきた紫・白・黒・赤・青の五色について自分なりの見解を述べていきたい。

紫は古代中国での例外はあったものの、日本において一貫して高貴な身分の者が使う色として扱われ続けた。だが、それだけでなく恋愛を象徴する色であり、また使うことが許されない身分の人間にとっての憧れでもあり、だからこそ聴色や似紫といったものが生まれ、用いられてきた。今でも紫は特別というイメージが持たれている。

白もまた昔から今日に至るまで神とその使いとされる生物の象徴や神事に使われ、またその何色にも染まっていない色相から「清い」という概念と結びついており、「潔白」などの言葉が生まれたように日本人がいかにも「清らかさ」に価値を見出していたのかが分かる。

このように時代を問わず変わらないものもあるがいくつかは時代とともに変化した。

黒は平安時代では仏事や凶事などに使われてきたが、武士の時代においては合戦で纏う鎧の色として、纏う者の地位を誇示し、江戸時代では黒の系統に入る「鼠色（灰色）」が庶民に愛用された。「暗い」という感覚から生まれ、死に結びつきやすい色ではあったが、それだけではなかったのである。赤もまた、かつては高貴な色であり、身分を表すためやその鮮やかさから人を奮い立たせる勇壮さを持つ色ではあったが、紅花から作られた紅が庶民に出回り、化粧などに使われるようになって次第に女性と関わりの深い色になっていったのだろう。

そして青、特に藍色や紺色は広く庶民に用いられてきた。黒と同様に武士の間に用いられるこ

ともあったが、藍は日本独自のブルー、ジャパン・ブルー（日本の青）とも呼ばれ⁵⁶ それだけ藍色は日本人に好まれてきたのだろう。藍染で最も濃いとされる紺色も「紺屋の白袴」という諺ができる程に親しまれていたのだ。

また、三つの時代から気づいた特徴がある。平安時代と鎌倉時代では色彩は主に社会の階層で上位に位置するものが身分の象徴、力の誇示を目的に使うことが多く、それ故に華やかさや勇壮さといったものが求められていた。江戸時代になると規制はされていたものの、庶民はそれぞれの美意識を表現するため一見地味なしかし趣のある色を使い、その表現方法にも工夫を凝らした。

時代を経るにつれて色彩は身分を表すものであり、同時にそれぞれの個性を表現するものとして使われるようになった。これは、現代の私たちにも同じことが言えるだろう。

この傾向は、貴族・武士が階層の上位に位置しながらしきたりや慣例に縛られることが多いのに対し、階層では下位にあり規制されながらもそれを遵守し、かつ美を楽しむ方法を編み出した庶民の工夫によるものだと私は考えている。身分というものがあっても人は柔軟に対処し、適応するという事の表れであろう。

最後に

現在日本古来の色彩名はほとんど使われることなく、私たちは「赤」「青」といった色一つの色彩名で言い表すことが多い。これは明治以降欧米からあらゆる文化・思想を導入し近代化していく過程で、色彩についても西洋の色彩感覚の影響を受けて、現代使われている「赤」「黒」「白」「青」というひとつの色彩を一語で表すようになったと考えられる。色名を使い分けなくても一語で表現できるという機能が受け入れられたのだろう。

さらに、身分もない現代社会で私たちは思い思いの色を使っている。かつて日本で色彩は身分を表す手段であり、紫や赤という一部は高貴さを象徴するものであった。

しかし、人々は色彩を権力を誇示するものとして使うだけでは済ませなかった。時代によって意味合いは変わってきたが、自分の心情を色彩に託したり、神への信仰や祈りなどを込めて色彩を用いてきたのである。ここに人々が色に感情や信仰、祈りなどを見出していたことが分かる。

それだけに今の状況は残念としか言いようがない。かつての日本人が見ていたであろう色彩は変わらず残っているはずなのに、それを表現した色彩名が失われてきているのである。

だが、一方である分野に関して色彩の繊細な認識は残っている。第三章で紅について述べたとき、化粧に触れたのだが、現代においても化粧にはいくつもの色がある。

例えば口紅やリップ。昔口紅といえば赤であるが、現代は赤だけでなく、ピンク・ベージュ・パープルといくつもの種類があり、商品名も一つ一つ違っている。口紅以外にもマニキュアに至っては赤・青・黄・緑・白系統のものまで数多くあり、濃淡やパステルカラー、色味なども数え切れないほどである。近頃は女子高生らもリップの一つはつけていることが多い。

この多彩さは技術の進歩で多様な色を作りだせる事と、買い手である女性たちの色に対する認識の細やかさにあるのではと私は考えている。女性たちは色を使い分けることも多い。明るい色は唇と肌の境界をぼかし軽く感じられる為カジュアルな印象を持たれやすく、濃い色は唇を際立

たせエレガントさを演出するのでフォーマルな場で使われることが多い。

何より、個人の顔に合っているかが重要である。肌の色や元々の唇の色にも左右されるので、口紅（リップ）の色一つとっても色々と使い分けることが可能となるのである。

この流行や自分に似合っているかという視点での色の見方は、かつての日本人も持っていたものであり、そもそも色の使い方は権力を除くとやはり使う人の好みや感性によるところが多い。十二単の色の組み合わせの選び方も現代の女性の化粧の色の合わせ方も「自分を美しく見せる」という狙いでは同じなのである。

それを踏まえると、人が色彩を使うのは「自分を美しく見せる」「力を誇示する」という目的によるものであり、それだけ色彩が我々に与える効果が大きいのである。人間の五感で最も大きい割合を占めるのが視覚であり、視覚では形や大きさも重要であるが、色は最も分かりやすい表現なのだろう。

三つの時代の階級と色彩を研究し、当時を生きる人々がどのように生きていたのか、そして支配と被支配という関係にあってどのように色と関わってきたのか。私達日本人が色に対して持っているイメージを理解するのに、この三つの時代とその背景にある文化や人々の生活は大いに役立つことは確かである。

注

- 1 色の三属性の一つ。明るさの明度、鮮やかさの彩度に並び色合いを表す。
- 2 古く日本に入った漢字音の一つ。和音と呼ばれていたが、平安中期以後、この呼び名でも呼ばれるようになった。仏教関係の語などによく使われる。
- 3 漢字音の一つ。平安初期までに遣唐使・留学僧などに伝えられた。当の首都：長安の北方標準音に基づく。
- 4 鉄器・銅器などに刻まれた文字や文章。中国、殷・周時代の青銅器に鑄刻されたものを特にさす。
- 5 ありさま。姿。
- 6 銅または銅合金の表面に生じる緑色の錆。
- 7 春秋時代と、次の戦国時代。周の東遷（前770年）から秦の始皇帝による天下統一（前221年）までの550年間を指す。
- 8 中国の古代王朝で、秦滅亡後、前202年漢王劉邦が項羽を破り建国した。
- 9 前12世紀末に、武王が殷を滅ぼし建国した。
- 10 春秋戦国時代の国の一つで、戦国七雄の一つ。
- 11 劉邦の前漢と新の後に建国された後漢のこと。
- 12 伝説上の帝王で、名は軒轅（けんえん）。神農氏の時、蚩尤（しゅう）との戦いで勝ち、推されて帝になった。衣服・貨幣・暦・医薬・音律などを定めたとされる。
- 13 『論語 陽貨篇の書き下し文と解説：2』
http://www.5fbiglobe.ne.jp/~mind/knowledge/classic/rongo017_2html
- 14 春秋時代の列国の一つ。周の宣王の弟桓公友が、鄭に封じられたことから始まる。
- 15 中国発祥の民間信仰。不老不死を探求する「神仙思想」と、「無為」で「道（タオ）」に従う「老荘思想」に基づく。
- 16 中国の二十四史の一つ。唐の太宗の命で編纂された。
- 17 後漢滅亡後の、隋の統一まで現在の南京に都した六の王朝。
- 18 天界に住み万物を支配するという道教の最高神。
- 19 『日本人の愛した色』吉岡幸雄 新潮選書 p66
- 20 天皇の后が住まう後宮の内、淑景舎という建物の別称。壺（中庭）に咲く花が桐であることからこう呼ば

- れ、天皇のいる場所から最も離れていた。
- 21 天皇の寝所に使える女官。
 - 22 後宮の内の一つ、飛香舎の別名。
 - 23 天皇の寝所に仕える女官で、更衣よりも上位である。
 - 24 源氏の最初の正妻。年上で気位が高く源氏とは長いこと打ち解けられなかった。一子夕霧を出産後に亡くなる。
 - 25 髪を結う紐。
 - 26 朝廷の衣裳を調達する役所。
 - 27 『源氏物語の色辞典』 p114～p123
 - 28 明石（今の兵庫県）に住んでいた貴族の女性。失脚して須磨に隠棲していた源氏と知り合い、一女（明石の姫君）を産む。養育を紫の上に託した。
 - 29 同上 p116
 - 30 源氏の側室の一人。容姿はそれほどでもないが、玉鬘などの養育を頼まれる。
 - 31 同上 p115
 - 32 源氏と関係があった女性（夕顔）の娘。源氏の養女になる。
 - 33 同上 p115
 - 34 源氏と関係があった女性。夫の死で出家したが、源氏に引き取られていた。
 - 35 源氏とかつて関係していた六条御息所（元東宮妃：今でいう皇太子妃）の娘。源氏の息子、冷泉院の後である。六条御息所の頼みで、源氏が後見役となった。
 - 36 武士集団の戦闘を主な題材とした叙事文学。
 - 37 琵琶を弾いて物語を語る盲目の僧侶。
 - 38 馬の毛色的一种。茸毛（白に黒や濃褐色の毛が混じったもの）に灰色の銭の形をした斑点がある。
 - 39 鞍に施された金の縁取り。
 - 40 『平家物語②巻第七～巻第十二 灌頂巻』市古貞次訳 小学館 1994年発行
 - 41 日本史では大化の改心頃をさす。
 - 42 平安末期以後源氏の氏神とされる。菩薩とは神仏習合思想で八幡神の本地（本来の姿）を菩薩としたもの。
 - 43 鎌倉時代初期の軍記物語。皇位を巡って起こった「保元の乱」の顛末を記す。
 - 44 紗の地に金糸などを織り込んで模様を表した絹織物。
 - 45 着物全体が鹿の子絞り（鹿の背中のようなまだら模様）を施した物。非常に手間がかかる。
 - 46 紡毛を原料とした起毛させた厚地の毛織物。十六世紀後半に日本にもたらされた。
 - 47 沈香という東南アジアの樹木の幹から採取されるお香の最上品。
 - 48 井原西鶴が書いた五人の女の恋物語。実話を基にした物語で、身分違いの恋、不義姦通の末の悲劇を描く。
 - 49 井原西鶴集①『好色五人女』三、p314
 - 50 式亭三馬の滑稽本。
 - 51 岩手県南部地方で産する紫草。日本一の品質を誇ったと言う。
 - 52 秋田県北東部で産する紫草。
 - 53 伊勢貞丈著。前後30巻。公家、武家の有職故実や事物の起源、字訓の正誤などを広く随録した物。『故実叢書』に収録。
 - 54 代用として藍や紅花の交染めで紫に染めた物。
 - 55 着物全体に同じ模様が繰り返して描かれていて、一方的に柄を繰り返しているもの。
 - 56 『日本の色』コロナ・ブックス編集部 2013年1月17日 株式会社平凡社 p54 「藍、あい、物語」白石かずこ

参考文献

- 『ものと人間の文化史 色染と色彩』前田雨城 1980年4月1日 初版発行 法政大学出版局
『源氏物語の色辞典』吉岡幸雄 紫紅社 2008年出版
『日本の色を染める』吉岡幸雄 岩波新書 2002年12月20日 第一刷発行
『平家物語②巻第七～巻第十二 灌頂巻』市古貞次訳 小学館 1994年発行
『日本人の愛した色』吉岡幸雄著 新潮選書 2008年発行
『井原西鶴集』より『好色五人女』 小学館 1996年発行
『日本の色』コロナ・ブックス編集部 2013年1月17日 株式会社平凡社 p54 「藍、あい、物語」白石かずこ

参考URL

- 『論語 陽貨篇の書き下し文と解説：2』
http://www.5fbiglobe.ne.jp/~mind/knowledge/classic/rongo017_2html
『聖天宮 | 道教とは』 <http://www.seitenkyu.com/taoism.html>
『紫のゆかりの姫君たち』 <http://www.genjimonogatari.com/Page/Genji/yukari.html>
『源氏物語・和歌鑑賞く桐壺』 <http://www.komachi-web.com/.../waka01.html> (平成26年6月2日 アクセス)
『09葵：「源氏物語」ウェブ書き下ろし劇場：台本：演劇の世界』 (平成26年6月2日アクセス)
『日の丸の起源－その7－日の丸の扇（平家の赤旗、源氏の白旗）』 (平成26年9月29日アクセス)
http://www.rekishinosato.com/essay1_7.htm
『色の万華鏡 色の日本史 第四回 源氏の白旗・平家の赤旗・甲冑』 (平成26年9月25日アクセス)
http://www.wanogakkou.com/life/00100/00100_004_04html
『色の万華鏡』 http://www.wanogakkou.com/life/00100_top.html
『Happy Life Style 口紅の濃淡は見せたいイメージによって使い分けるのが正解』 (平成27年1月20日 アクセス)
<http://happylifestyle.com/10534>

(卒業論文指導教員 神田より子)